

令和6年度 赤穂西中学校区小中連携教育 活動記録

1 令和6年度 小中連携教育研究部会具体的実践

『本年度の研究テーマ』

- 小・中学校相互の授業研究を通して、子どもたちの実態の相互理解につとめる。
- 算数と数学の内容の系統性を把握し、指導の継続性を求めて、指導の改善を図ることにより、小・中学校9年間を見通した指導の相互理解につとめる。

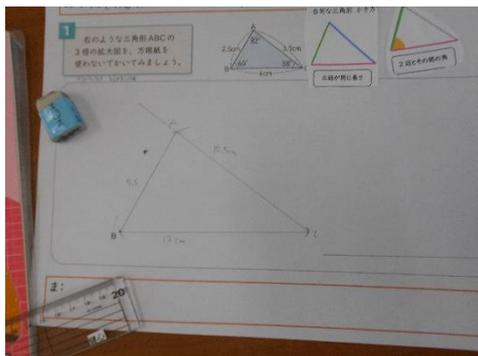
2 赤穂西中学校区の活動報告

(1) 赤穂西小学校

○実施日：令和6年10月21日(火) ○単 元：6年生算数科「図形の拡大と縮小」

○事後協議

- ・拡大と縮小は、角度は変わらないが、対応する辺が拡大・縮小されていることはよく理解していた。
- ・最初の合同な図形の描き方を振り返る時間が少し長すぎた。軽くおさえて、後は児童に自分で考えて取り組ませてもよかった。
- ・コンパスをうまく使えなかったり、分度器の使い方を間違っていることもある。
- ・角度を測るとき、どこからどこまでを測るのかをわかってないと、0のスタートを逆にみる児童もいる。
- ・底面積が積み重なって、体積になっていることを捉えにくいので、立体模型は必要に応じて使っていったほうがよい。
- ・どこを底面積とするのか頭の中でイメージできない児童もいるので、具体的に色を付けたり立体模型で手で示さすなど支援が必要である。
- ・小学校の学習の中で、例えば比例・反比例では、決まった数を「a」で表記し、 $y=ax$ になるということも伝えて授業をしている。
- ・タブレットを授業でどう活用していくのか、小中での連携視点からも考えていく必要がある。

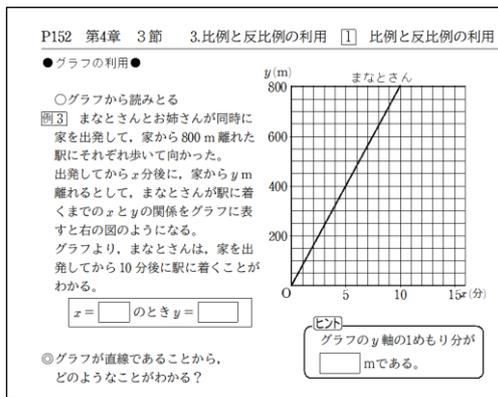


(2) 赤穂西中学校

○実施日：令和6年12月10日（火） ○単 元：1年数学科「比例と反比例」

○事後協議

- ・協同学習については、小学校でしっかりと話し合い活動を行っていることもあり、中学校においても生徒達が抵抗なく自分の言葉で説明したり、教え合ったりすることができている。
- ・小学校、中学校ともにわかりにくい子には教師がサポートしながら、できた子がスモールティーチャーとして教える姿が見られる。
- ・ミライシード、デジタル教科書などを活用しての学習を小学校、中学校ともに行えている。ICTもうまく活用して学力を定着していく必要がある。
- ・小中のつまづきの1つに、分数、少数の問題が挙げられる。小学校でも中学校に入ってから困らないように伝えてくれているが依然課題が残る。
- ・基礎基本の定着を引き続き小中それぞれで行っていく必要がある。



3 まとめ

どの教科においても小・中とのつながりを意識して授業を展開していくことは、児童・生徒の学びをより高めていくために重要なことである。特に算数・数学科に関しては既習したことを元に、新たな学習を進めていくことが強い教科であるため、1つのつまづきが多くつまづきを生む可能性もある。

そのため、教師が指導内容のつながりを十分に把握し、個に応じた算数的活動を通して、どの児童・生徒にも気づき、分かる喜び・楽しさを感じ取らせることができると考える。また、分かると説明しようとし、また気づきを広めようとする。

児童・生徒同士で教え合うために、子どもたちが知りたい、学びたいという欲求をもてるような教材提示の仕方も考えていかななくてはならない。違ったアプローチの視点で学びを深めるためにICTの活用もさらに進めていく必要がある。小・中でどのように活用しているのかを共有し、児童・生徒が自分で発展的に活用するようになれば、問題解決の力はさらにのびるのではないかと考える。

小中連携を通して、授業の進め方や家庭学習、学校生活など多岐にわたり情報共有できたので、児童・生徒の系統立てた学習展開の充実を進めていきたいと思う。